

コハクラン *Kitigorchis itoana* F. Maekawa の観察記録

今井建樹

Kenju Imai: Observation on *Kitigorchis itoana* F. Maekawa (Orchidaceae)

はじめに

コハクランは1971年に発行された「原色日本のラン」(前川文夫)の図譜作成のための資料蒐集が動機となって、伊藤三郎・鈴木吉五郎両氏によって発見されたとされている。本誌によれば、「本州中部フォッサマグナ地帯の亜高山帯(八ヶ岳・櫛形山等)の針葉樹林下のやや暗い適潤地に生じ、個体数も少なく、絶滅に瀕している」とある。

二十年程前に伊藤三郎氏の案内でコハクランの生育地を調査した。その時数m四方位の狭い範囲に数本の開花株が見られた。しかしその時は既に花期が終わっていた。そこで翌年花をみるため再度そこを訪れたが、1本の生育している株も確認することはできなかった。

た。掘りとられた形跡がなかった事から、採掘によるものではないと思われた。このランの生態に疑問を抱き調査をすることにした。

個体数も少なく、絶滅を危惧されている種であるため、そのことを気遣いながらの調査のため、十分に意を尽す様な調査はできなかったが、現在までに調査出来た事をまとめてみた。

1. 観察記録

1993.5.8から1996.6.20の間、八ヶ岳山麓(標高1850m)で観察したものである。表1はその集計表であり、個体の位置関係など分布状況を示したものが図1から図6である。

表1 コハクラン調査集計表

調査 期日	1993. 5.8	1993. 7.6	1993. 10.16	1994. 5.7	1994. 6.29	1994. 7.29	1994. 10.1	1996. 6.20	1996. 10.27	備 考
	葉長	葉長	花数	葉長	葉長	葉長	葉長	葉長	葉長	
A	8.0	8.0	9個							
B	2.8	3.3		4.0	4.4	5.0	5.2	4.0	3.0	
C	5.0	5.2		5.0	5.0	5.3	5.5	3.3		
D	4.5	5.8	4個							
E	4.5	5.5		9.0	9.0	9.2	9.2	5.2	4.0	3.5
F	5.8	7.0		8.2	8.2	7.9	7.8	5.6	4.2	3.8
G				6.3	6.9	7.5	6.6	7.5	5.3	5.0
H				11.5	11.8	12.0	8個			
I				4.5	4.5	4.5	5.2			
J				4.5	4.9	5.2	5.0	5.5	5.0	4.0
K				12.0	13.5	13.6	8個			
L				13.7	13.7	14.0	10個			
M				10.0	11.5	11.5	5個	11.7	7.5	
N				14.0	14.2	14.2	0個	12.3	7.0	4.5
O				11.0	13.7	13.7		11.2	9.6	
P								3.0		
Q								7.0		
R								8.5		
S								9.6	6.0	5.0
T								9.6		
U								7.5		
V									4.0	8.3
W									7.0	8.6

備考

1. A B...Wは個体を表示した記号である。
2. 表中の空欄はその時点で無いことを示す。
3. 葉長単位はcmである。
4. 1995年は測定実測値がないので表中にない。

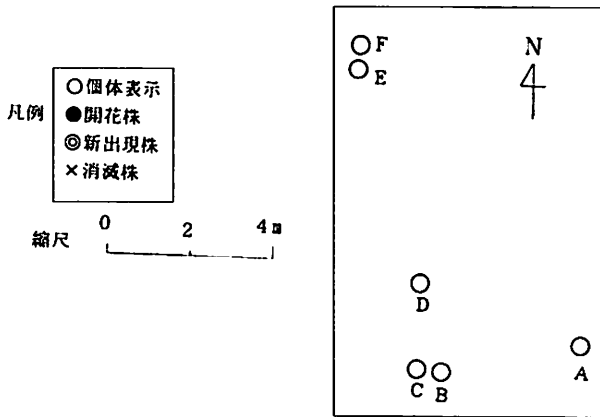


図1. 1993.5.8調査図

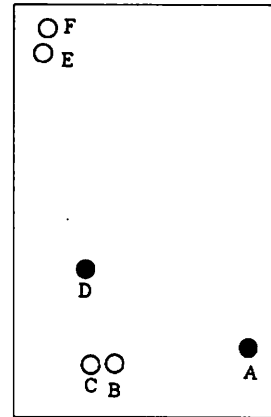


図2. 1993.7.6調査図

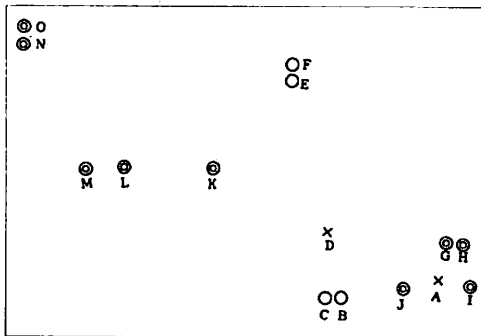


図3. 1993.10.16調査図

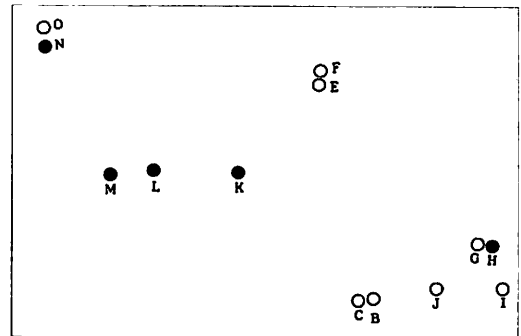


図4. 1994.6.29調査図

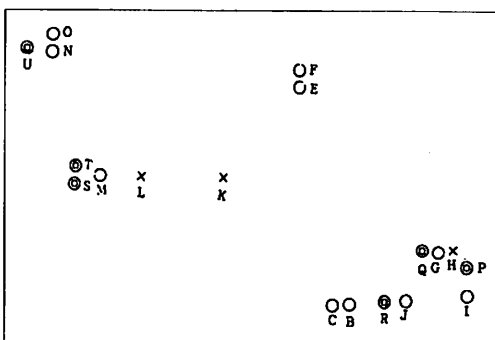


図5. 1994.10.1調査図

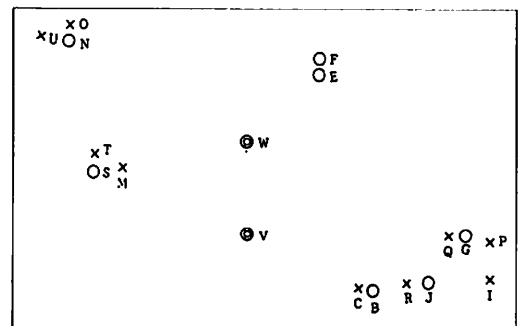


図6. 1996.6.20調査図

調査図について

- 1.最もコハクランの密集している約20m四方を調査地として選定した。
- 2.縮図によって個体の分布と出現状況を表示した。
- 3.調査時点でその位置に始めて見られたものを新出株とした。
- 4.個体表示記号はその個体が出現してから枯死するまで同一である。

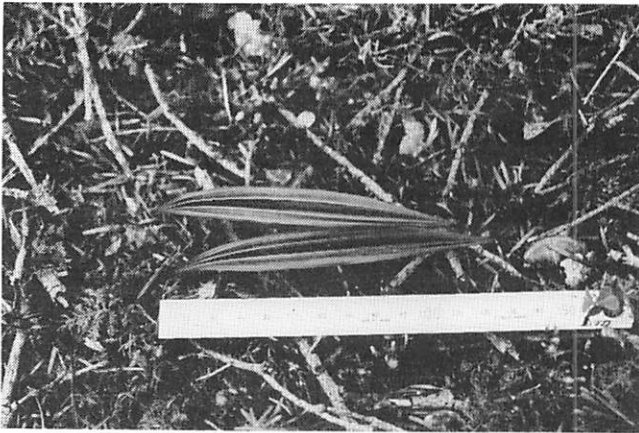


図7. 葉 1994.5.7撮影 2株すぐ近くから出ている

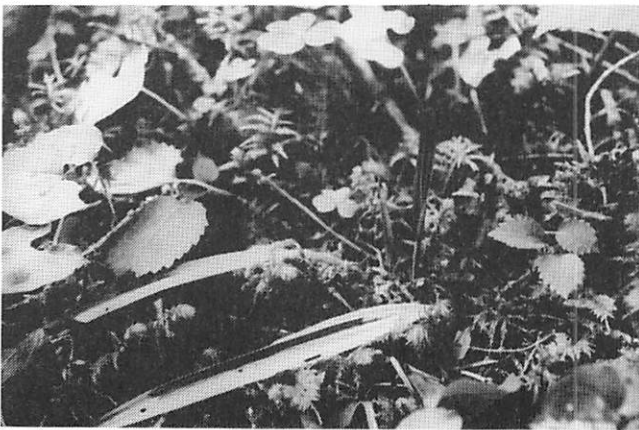


図8. 葉のチェンジ 1994.8.25撮影 図7と同じもの、左側に寝ている白く写っているのが古い葉、上に伸び始めている新しい葉が黒く1本だけ写っている。

2. 観察結果と考察

(1) 常緑である

葉は1枚、形は狭披針形で固く、主脈は白く、著しいひだがある。最大長さは19cm・幅2.7cmのものもあった。葉は7月から8月に枯れて新しい葉にかわる。葉が枯れてしまってから新しい葉の出るものと、まだ前の葉が青い内から新しい葉が出始めるものとある。ほとんどの葉は地面に水平にひろがるが、中にはほぼ垂直に近い状態に伸び上がるものも僅かながら見られた。新しい葉が出ると冬になるまで成長を続け、常緑で越冬する。翌春から夏の葉の枯れる

までの間は、ほとんど生長しない様である。(図7・8)

(2) 花を付けるものは少ない

6月になると花茎を葉の付け根から伸ばし、6月下旬から7月上旬に開花する。しかし年によって、最高10-15日くらい花期のずれがあった。花を付けるものは、概して大形の葉のものであるが大きい葉のものでも花を付けないものも見られた。表1からも分かるようにB株等は葉の長さ4-5cmで、観測を初めてから4年を経ても未だに花もつけずほとんど生長らしい生長もしないままであった。調査23株中8株が開花し開花率は約35%であった。また葉が見られるだけで何年か経って、開花しないまま消えていくものなども見られる。

花茎の長さは14-29cmであったが、図鑑等の記載には30-40cmとあるが本調査地のものは小形ののだろうか。花は総状花序に付けるが4個から最高11個であった。

花を付けるものの数は年によって大きく違っている。1993年には2個体、1994年には5個体、1995年には2個体、1996年には花の咲いたものは全然なかった。

(3) 花をつけたものは枯れるものが多い

本調査地内では花を着けたものは8株あったが、1株だけは生育を続け、他は全部新しい葉は出してこなかった。調査のN株は花茎を出したが何らかの原因で花茎が損傷し、花をつけないで終わった。これは花を付けなかったものと同じような状態でその後も葉だけで生き続けている。花が咲く事とその後の生育



図9. 花を着けたコハクラン 1993.7.6撮影



図10. 9個の花を着けた花序 1994.6.29撮影

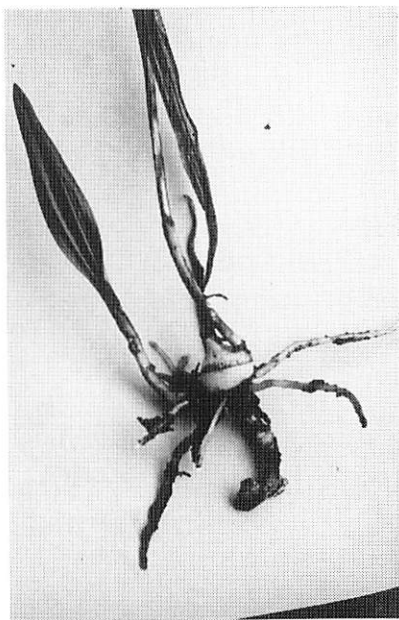


図11. 花をつけたもののラッキョウ状の偽球茎
1936.9.6撮影

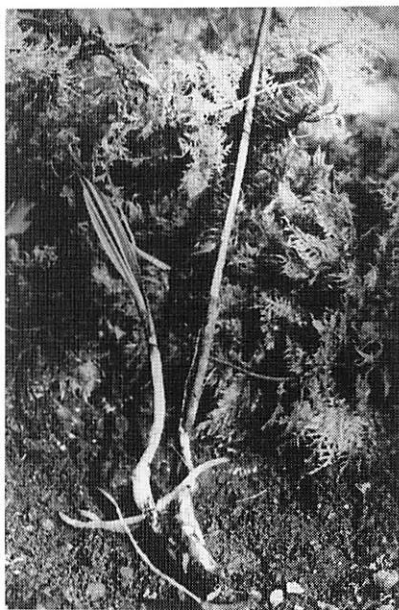


図12. 花をつけたものの棒状の偽球茎
1993.9.6撮影

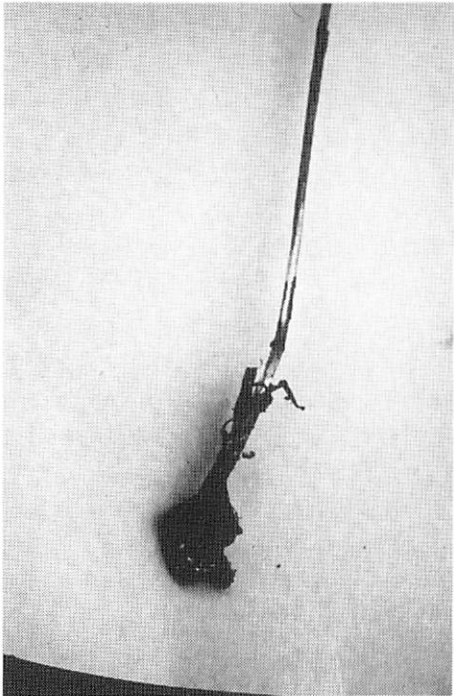


図13. 花をつけたものの枯死した偽球茎 1993.9.6
撮影



図15. やや膨らみかけた果実 1994.7.29撮影 最終的には種子はできなかった



図14. 不稔の果実をつけたもの 1995.8.6撮影
葉は枯れ始めていた

には深い関係があるように思える。調査地域外のものであるが、花が終わって新しい葉を出して来たものを見ると地下部は、白色のラッキョウ状の偽球茎が残り、新しい葉の下にも別の偽球茎ができ始めている(図11)。また別のものでは偽球茎がラッキョウ状に膨らまず棒状であった(図12)。新しい葉を出さなかったものの地下部は黒変して枯死していた(図13)。これらは調査個体数が少ないため全ての状態とはいえないと思うが、観察し得た一部である。

(4) 突然に姿を現す

葉も小さく地面に伏す様に出ているので探すのに困難である。時々花の咲いているのに突然であって驚くことが多かった。そこで1993年から範囲を限定して詳しく調査を続けることにした(表・図)。花期にはよく目につくが花を付けるものは少ないし、夏は他の植物に隠れてなかなか見つからない。春の他の

植物が芽生える前と、秋の多くの植物が枯れた時が見つけやすい。そこでこの時期に調査し記録するようにした。

調査を開始した1993年の秋には表1の様に新しい9株を発見して驚いた。しかも葉長10cm以上のものが4株もあった。これと同じようなことが1994年の秋にも起きている。ところが1993年の新しく出たもの4株は翌年になってすぐに開花している。これはどう考えても種子から発芽したとは考えられない。地下に休眠状態でいたものが突然活動を始めたのではないかと推測するしかない。花も付けないで小さな葉だけで何年も生き続けるもの、これが途中で消えてしまうもの、また花を付けるとその後は姿を消すもの等不可解な事ばかりである。

(5) 結実しないものが多い

調査区内で開花したものは今までの調査では全て不稔であった。調査区内のL株は10花を着けた最も大きなものであったが花が咲き終わると果実は萎んで黒変してしまっただけの不稔であった(図14)。またその後葉も出していない。果実がやや膨らみかけたものもあったが、その後の調査で結局種子を作る状態にはならず不稔であった(図15)。

原色日本のランには、「果実は次年の春に成熟する」とあるが、現在までこうしたものを見たことはない。大きな疑問点として残り今後の調査によって確かめたい。

3. まとめ

個体数も少なく、絶滅を危惧されていることから、追求的に地下部を掘り取って見ることもできないまま、結果として多くの疑問点が残っただけの調査となってしまった。

地下部にある原初根茎と、それに着く偽球茎(偽鱗茎)の生育過程を種子の発芽時から追求していく手だてを考えなければ解決できな

いだろう。

調査中種子が結実したものを見ることが出来なかったが、個体数が少ないためか、受粉媒介に問題があったのか、気象条件等による植物生理上の問題なのか推測出来ない。いずれにしろ結果として、この状態は種の絶滅を招くことになろう。

本種は立派な葉をもち光合成を行っているにもかかわらず、次第に成長していつてある時点で花を咲かせ種子を残して繁殖していくという普通の植物のパターンとは異なるように思える。ある年突然姿を現し、大きな葉を出して翌年には花を着けものがあるかと思うと、何年経っても同じくらいの大きさの葉のままで生き続けているもの、これと同じような状態でいて、ある年突然姿を消すもの等がある。また花を着けた場合、そのまま生きつづけるものと姿を消すものがある。これらの現象を見る限り解決の鍵は地下部にあると思われる。絶滅を危惧され、限られた数しかない本種の地下部の状態を調べる、何かよい手だてはないものだろうか。とにかく予想以上に複雑な生活をしている植物ではないかと思われる。

おわりに

疑問点が分かっただけで、何一つとして解明できたものはない。本種は最近発見され稀少なものとされてきたが、その後各地で発見されている様である。八ヶ岳・櫛形山のほか中央アルプスの空木岳・駒ヶ岳の木曽側登山道沿。南アルプスの三伏峠や富士山等からも報告がある。非常に目につきにくいことから発見されないでいる地域が多いのではないだろうか。今後多くの地域での発見と、その生態が解明されることを期待したい。

コハクランが、その名のような琥珀色の花を何時までも美しく咲かし続けてくれることを願ってやまないものである。